第36号　35円
昭和49年9月25日

内　容

社会変革機関としての大学の役割 1
開館9周年・新館長就任を祝う… 2
大学院セミナー室地鎮祭…… 2
千人会…… 3
第69・70大学共同セミナー…… 4
第10回大学教員懇談会…… 6
ピアノ募金目標達成…… 7
第8回会員校事務連絡会…… 8
マスコミ余波…… 8
業務通信・利用状況…… 9

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人 大学セミナー・ハウス
《所在地》
東京都八王子市下柚木
(〒192-03)
電話　0426-76-8511～3
振替口座　東京74590番
《東京事務所》
東京都中央区日本橋本町3－3
三井銀行本町支店ビル5階
電話　東京(241)3961
編集・発行人　飯田宗一郎
製作　中央公論事業出版

社会変革機関としての大学の役割

＝不可欠な大学自治機構の変革＝

シラキュース大学名誉教授
モーリス・E・トロイヤー

現在、あらゆる分野における研究は、次の諸問題について大学が解決すべきであると訴えている。

一、大学は、技術面の改革のみならず思想的変革のためにも責任ある機関となるべきであること。

二、大学は、目標や方針の設定に際し、力や利害による決定を避け、あくまでも教育的方法による決定に最大限の措置をとること。

三、大学は、社会変革の機関としての役割を果たすために、大学自治組織の構成員に大学内外から代表を送り入れること。

さて、最近のローマ・クラブやMITの研究等では、現状のまま技術及び産業の進歩が継続するなら、ここ二五年以内に資源は涸渇するであろうと警告している。

しかし、このような科学の発達研究と技術者の養成は、大学を高度産業社会の推進の花形に仕立ててきた。また他方で、大学は科学技術の改革により生じた諸問題については、思想的変革機関ではないという考えの下に、その責任を意識的に回避してきたのではないだろうか。例えば、R・オッペンハイマー博士が核分裂による汚染の危険性について憂慮し、また、A・トインビー博士が歴史学を未来の予告にも用いるべきだと決心した時、彼等には批判の目が向けられたのである。

ところで、私は二年前、トロント、コーネル、シラキュースの各大学の管理機構を研究し、様々な学園紛争の文献を調べた結果、機構改革の最も適切な方法とその改革案について一つの結論に達した。それは、アメリカの場合、市民権や黒人問題、ヴェトナム戦争、あるいはそれに関連して大学で軍事に関係した研究をするなどという特殊事情もあろうが、過去一〇年間に生じた大学紛争の原因は、大学が基本的に社会および技術改革の担い手であることに起因している、ということである。この結論の背景には幾つかの仮説があるが、その第一は、教育的なもしくは研究に根ざした解決を計るならば、それは力による解決の場合とは異なり、非常に高いレベルで共通した結論を導くことができるということである。このことから明確な大学自治機構の変革・設置は、教育的過程を最大限に生かすことを不可欠としよう。

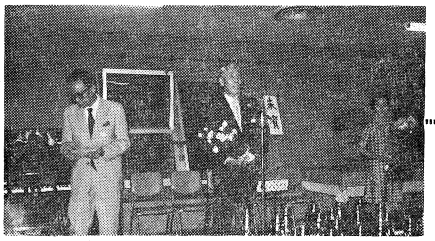
次にこのような社会変革の機関としての大学の役割を考えると、いわゆる大学の意思決定機関には、大学の内外から総ての構成員の代表を選び、民主主義の理念に裏づけされた管理機構、運営方法の必要が生じる。これらについてトロント大学を例に話を進めたい。トロント大学を選んだ理由はこの大学が機構改革に創造的な前向きの姿勢で取組んだことと、大学の機構が例えば一つの理事会の下に二つのカレッジと三つの教会に属するカレッジが含まれ、しかも一つの委員会で管理されるという複雑な機構になっているからである。

カナダの大学教員組合と大学協会によって設立されたDuff-Berdahl委員会（一九六三～六六年）は早くから管理機構の変更の必要性を指摘しており、トロント大学でも種々の経過後、全く新しい条例を要求するため管理機構の改革が六八年一二月に始まっている。

そこで注目すべきことは、大学の最高議決機関である管理委員会、学長の下の評議会、教職員組合並びに学生行政部評議会のいずれもが、これから作る大学管理委員会The Commission on University Government at Torontoは、あくまでも小人数で運営されることに合意したという事実である。この大学管理委員会は、六八年一二月に第一回会合を持ち、三二週の間に、平均週二時間、一五〇回以上の会合を重ね、八一の意見の申し立てを受け、公聴会を五二回開きほとんど全ての大学の構成員と面接をし、それらを一〇七の勧告案にまとめあげた。議案委員会はそれを一五の決議事項に煮つめ、大学管理委員会は総ての事項について賛成を得るまでにこぎつけたのである。その中には一院制の評議会と管理委員会の責任と機能についての承認も含まれている。しかし、構成員の代表の選出方法と、彼等が同等の権利を持つか否かということが最重要事項として残り、最後まで時間を費している。トロント大学条例は、このように二年半にわたる管理委員会で検討された後、七一年、議会を通過し成立しているが、名誉総長、学長、学長指名の大学幹部職員、副知事指名の学外者、教育職員・学生代表、行政職員を代表する者、卒業生の合計五〇名をメンバーに認めている。

最後に、ウ・タント元国連事務総長やローマ・クラブあるいはMTIの研究・調査に基づく警告が正しいとすれば、我々の社会は、大学が人類社会の生存のために技術面のみならず、社会変革の責任ある道を速やかに発見することを要求しているといえよう。いい換えるならば、それは社会の将来の行方を見出すことである。そしてそのために大学は内外の良心の声に耳を傾けながら、社会福祉とは何か、人類の発展とは何かというような問題に取り組むべきであると私は考える。

（第10回大学教員懇談会より。文責編集者）



開館九周年と併せて新館長就任を祝う会

昭和40年7月5日の開館式より早くも九年を経過した同月同日の昭和49年7月5日、開館九周年を祝う小さな行事があった。

それは、開館七周年を記念して詩人藤富保男氏より当時の専務理事飯田宗一郎氏に贈られた献詩「火を握る人」（セミナー・ハウス第29号参照）の銅板レリーフの除幕式と、それに続く新館長就任を祝う会である。

除幕式プログラム　於ようこそ広場

司会＝河田喬夫・飯田能子

▽開会　17時

▽除幕　長松昌男（共同セミナーOB・長松昭男氏長男）

▽詩のこころ　作詩者　藤富保男

▽大学セミナー・ハウス讃歌

▽記念撮影

銅板寄贈者　早稲田大学教授　染谷恭次郎殿

レリーフ製作者　銀和徽章㈱

ようこそ広場のコンクリート記念板は見事に完成し、除幕で一般に披露されたが、残念ながら小雨の中の行事であったので一部を変更、早々に第二会場へ移った。新館長就任を祝う会は、午後六時から大食堂で開催された。

◇

司会＝土田美芳・鳥谷部清忠

出席者は来賓二八名の外、在泊のグループで、7月5、6両日にわたって行われていた大学セミナー・ハウス会員校事務連絡会の人人、東京大学、東京都立大学、明治大学、慶応義塾大学、学習院大学、千葉商科大学など国公私立の各大学ゼミナールに一企業研修グループが加わってさしもの広い会場も満席となる。

◇

開会奏楽のピアノ演奏は共同セミナーのOGである高橋園子さん（旧姓吉田）、祝辞は前慶応義塾大学教授で現在千葉商科大学教授である小竹豊治、共同セミナー委員でもある中央大学教授世良正利の両氏より、それぞれ新館長に対し親愛の情溢れる言葉が述べられ、今後の健康と活躍、さらにセミナー・ハウスの発展を希望された。

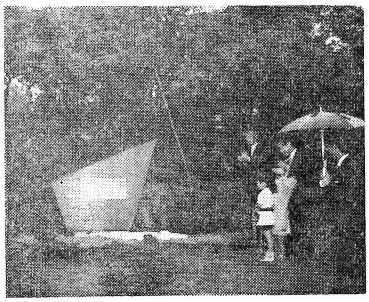
ついで館長就任の祝いとしてハウス職員を代表して創立当初からの職員荒川孝子さんから飯田新館長に記念品が、また共同セミナーOGの萩原清子さんから花束が、館長夫人に学習院大学女子学生から同じく花束が満場の拍手の中で贈呈された。

つづいて飯田新館長より地元来賓、教授、学生の皆さんにお礼の言葉が述べられた。

挨拶の後、多忙の時間をさいてかけつけられた八王子市長後藤聰一氏の音頭により二五〇名がジョッキを捧げて乾杯、会食に入った。

窓外の梅雨空とは対照的に会場は明るく、賑やかなたのしいムードが溢れ、食堂心づくしのご馳走もたくさん用意され、歓をつくして午後7時20分幕を閉じた。

なお、当日演奏に使用されたピアノは創立九周年記念として新調されたもので、当日の出席者からもその購入資金として多額の協力があった。



除幕された銅版レリーフ

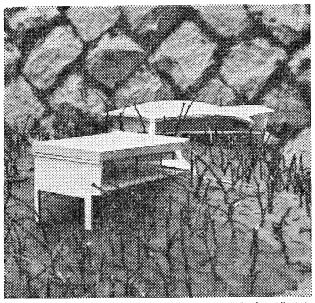
大学院セミナー室新築と多摩民家移築の地鎮祭行われる

9月3日、台風一過の秋晴れの朝10時から、二つの地鎮祭が行われた。一つは講堂西側に建てられる地下一階（機械室）、地上一階（セミナー室二室）の鉄筋コンクリート造りの大学院セミナー室。その名のとおり、主として大学院生のセミナー、研究会等に供するのを目的としているが、この増築によってセミナー室不足が解消し学会などの利用にも便宜が加わり、施設が一段と充実することとなる。総工費約五千万円、うち千三百万円が国の補助金である。来年2月竣工予定。

もう一つは、多摩地方独特の茅葺入母屋造りの民家の移築工事である。八王子市鑓水の小泉勇二氏より、同家の住居となっていた家屋を寄付していただいたことは、本紙29号ですでに報じられているとおりである。移築場所はバス通りの表入口から入ってすぐ左側の本館にのぼる〝いろは坂〟付近で元のキャンプファイア場である。総工費千五百万円で、五百万円は日本万国博覧会記念協会の補助による。竣工予定は同じく来年2月末。

地鎮祭にはU研究室から吉阪隆正早大教授外二名、清水建設から今村次長外四名と田中木工社長。それに飯田館長、藤永会計課長以下職員一〇名が出席した。職員の土田神官をもって略式の収祓を行い、館長の鍬入れをもって、奇しくも二つの地鎮祭をめでたく終了した。

当夜の宿泊者一二〇名にはお祝いとして紅白の饅頭が夜のお茶どきに配られた。



模型にみる大学院セミナー室（後方，講堂）

●寄付行為一部変更認可さる

寄付行為第一四条第一号に、「理事十三名以上二十名以内」とあるのを、次の如く改める。

「理事二十名以上二十五名以内」

昭和49年6月14日の評議員会において可決承認された改正案を同年7月24日に文部大臣に認可申請書を提出し、同8月27日付をもって認可の通知をうける。

◆千人会◆開館十周年を明年に控えて◆再び会員増加運動を開始する◆名実ともに一、〇〇〇人の会に！

昭和42年7月に千人会が誕生してからすでに七年になりますが、未だに名実ともに一、〇〇〇人の会になりません。

来年7月には開館十周年を迎えますので、この時までに一、〇〇〇人の会にしたいというのが、目下の悲願です。七周年に際して一大キャンペーンをいたしましたが、ここに再び新しい会員を勧誘いたしたいと存じます。当ハウスをご利用くださった先生方に「千人会へのお誘い」をお送りし始めて二ヵ月、二一人の新会員のお申込みをいただきました。

現在の会員数は別記のとおり八八五人です。一、〇〇〇人にはもう一歩です。七年間つづけて後援して下さっている会員の皆様に、改めて感謝申し上げます。

千人同心とは……

八王子千人同心は、もと甲州武田氏の家臣であった者が、徳川家康の配下に属してより、江戸の西の守備にあたり、明治維新まで忠勤を尽くしてきた。

大学セミナー・ハウスを支援してくださる善意のグループを千人会と命名したのは、徳川幕府を守った千人同心隊が八王子にいたという史実に基づいたものである。

千人会は後援会であり、賛助会なのであるが、参加とかご縁とか出会いとかいう意味を持たせたい。会費という金額の数字以上に千人会には貴重な財宝が含まれている。それは地の塩として、教育環境の腐敗を防ぎ、世の光としてセミナー・ハウスが丘の上に輝くための灯である。「連帯」の実例として日本の風土の中に大きく育ってほしいのである。

◇

■現在会員は八八五名です

大学人＝六九三名

社会人＝一九二名

＜8月末現在＞

■新しく会員となられた方々

〔第25回報告（申込順）〕

C　横浜国立大学助教授　市川　博殿
C　日本長期信用銀行　川添奈津子殿
B　慶応義塾大学商学部長　和田木松太郎殿
C　日本経済新聞社　羽根田操殿
C　神奈川大助教授　堀野定雄殿
C　東亜燃料工業㈱　大原洋司殿
C　東京女子大教授　柏木恵子殿
B　明治大学教授　石井素介殿
C　東京学芸大教授　長津一郎殿
B　日本大学教授　大即英夫殿
A　東京学芸大助手　池田義人殿
B　東京学芸大教授　後藤捨男殿
C　国際基督教大学教授　古畑和孝殿
C　成蹊大学教授　佐々木克巳殿
C　青山学院大学助教授　石川信男殿
C　大阪大学教授　三井利夫殿
C　慶応義塾大教授　石川　明殿
B　一橋大助教授　久保内端郎殿
C　日本大学教授　中島邦男殿
C　東京大学教授　木原太郎殿
C　上智大学教授　高橋浩爾殿
C　法政大学教授　中川作一殿

■会費ありがとうございます

昭和49年6～8月（敬称略）

荒井良雄、野田一夫、道喜美代、望月継治、徳末愛子、藤井耕一、高柳　暁、高橋忠次郎、竹内喜夫、石川孝夫、柴田恭二、前田護郎、見田宗介、青木郁朗、和歌森太郎、吉田幸弘、太田秀通、長　清子、二宮永蔵、朱牟田夏雄、吉松藤子、中嶋嶺雄、秀村欣二、小畠守生、佐藤　進、北村宗彬、大野泰雄、池宮英才、篠原泰三、岡田正弘、篠沢秀夫、岩橋宣隆、藤野　登、黒田成俊、佐竹　寛、西川　治、高山　旭、芹沢　栄、速水　清、川島順平、平山美枝子、松尾浩也、北野美枝子、芝川栄三、鈴木二郎、川添利幸、土田美芳、慶伊富長、藤原鎮男、千葉岑雄、堀野定雄、和田木松太郎、田中未来、高島善哉、三橋文雄、中村哲哉、山内恭彦、石川　馨、川田雄一、黒田道雄、坂田道太、大村晴雄、中村浩三、田島恵児、内山尚三、鳥海俊宏、山西　貞、千住鎮雄、松原治郎、佐藤　弦、名東孝二、中村進、徳久球雄、浅川　淳、鈴木成文、色川大吉、古本捷治、江沢　洋、萩原清子、山本襄治、簗田長世、玉川直重、林　俊一、金丸重嶺、和田義信、松島　恵、尾崎　茂、西村敏男、田辺留次郎、中川一朗、笠松　章、福田歓一、市川節子、樋口美智恵、保々　房、厚東偉介、大畑徳四郎、岡　宏子、安藤良雄、山口重克、小池　滋、佐藤誠三郎、市井三郎、米地　実、中山　昌、藤岡通夫、黒田孝郎、藤井　隆、森川芳彦、総山孝雄、川田　侃、平出彦仁、井上　孝、浅井邦二、穐山貞登、市川　博、児玉久雄、村松　暎、山本武彦、原田行男、岡本　剛、菊地百合、山本芳夫、小林正一、田村　恭、中川重雄、遠山　啓、福島正久、藤田淑子、松村信治郎、長尾龍一、石川淳志、太田善麿、三和　治、石井素介、原納又夫、上代タノ

●寄付金報告（昭和49年1～8月）

五、〇〇〇円　弁護士　原増司殿
三、〇〇〇円　東京都立大学唄孝一殿
一、〇〇〇円　滝野川教会学校殿
一、七六〇円　成蹊大学宇野ゼミナール殿
一〇、〇〇〇円　株式会社友映殿
三、九三〇円　専修大学山本ゼミナール殿
五、〇〇〇円　慶応義塾大学西川ゼミナール殿

＜植樹基金＞

八、三八〇円　第64回共同セミナー殿
三、〇三五円　第65回共同セミナー殿
六、六〇〇円　第66回共同セミナー殿
三、〇〇〇円　石田賢二殿
五、〇〇〇円　横河ヒューレットパッカード殿
五、〇〇〇円

東洋英和女学院短期大学殿
三、五〇〇円　東海大学医療技術短期大学殿
三、〇〇〇円　東京都立大学心理学研究室　辻ゼミナール殿
五、〇〇〇円　横浜国立大学教育学部　49年度甲社一年殿
一、一〇〇円　東洋大学早川ゼミナール殿
五、〇〇〇円　第8回JACETセミナー殿

＜現物寄付＞

ゆりの木七本　婦人国際平和自由連盟辻キヨ殿
孟宗竹一五株　伊藤倉之助殿

第69回大学共同セミナー

主題▼トインビーと現代
期日▼昭和49年6月21～23日

＜全体講義＞
◇文明の行方
早稲田大学教授　鈴木成高氏
◇ヨーロッパの精神風土―その歴史と現実―
東京大学助教授　木村尚三郎氏
＜セクション演習＞
A　トインビーの思想の内的発展
神奈川大学教授　山本　新氏
（運営委員）
B　文明と宗教―支配と苦悩―
評論家　木村隆一氏
C　世界国家の可能性
共立薬科大学教授　堤　彪氏
D　現代の危機
聖心女子大学講師　吉沢五郎氏
E　西欧文明の省察と展望
青山学院大学教授　秀村欣二氏
東京大学助教授　木村尚三郎氏
（運営委員）
＜参加学生＞83名（内女子30名）
慶大(11)、青学大(8)、早大(7)、一橋大(6)、成蹊大、津田塾大(各5)、日大、独協大(各4)、法大、学習院大(各3)、東京学芸大、東京外大、ICU、明大、立大、日女大、武蔵大、和光大(各2)、東大、東教大、埼玉大、中大、明学大、東洋大、東経大、専修大、東女大、立正大、東海大(各1)
計29大学

◈

今回は、山本新先生はじめ「トインビー市民の会」などで日頃トインビーの思想の紹介とその実践に努めておられる先生方によって、五つのセクションが編成されトインビーの文明史観の全貌をより体系的に把握、理解することによって、われわれの当面する諸問題を考察しようとした。

全体講義では、鈴木成高先生がトインビー史観に照らして現代文明の行く方をさぐり、またヨーロッパ旅行から帰国されたばかりの木村尚三郎先生からは、ヨーロッパの精神風土の歴史と現実について、多くの事例を通した紹介があった。

◈

新入生歓迎セミナーとして開催されたこともあって、フレッシュマンの参加が多かった。応募の理由はさまざまであったが、セミナーを通してトインビーの思想とその実践を学ぶことにより自分が立っている現代を歴史の中に問うことができたという声が聞かれた。

10 July 1974

Dear Mr. Iida,

I was very pleased to receive your letter of 23 June and to hear about the seminar—'Toynbee and Our Time'.

Please thank all the other signatories of the letter on my behalf, and give them my best wishes.

With best wishes and thanks to you,

Yours sincerely,
Arnold Toynbee
Arnold Toynbee

The Royal Institute of International Affairs
Chatham House 10, St. James's Square London SW1Y 4LE

当セミナー指導教授の寄せ書きに応えたトインビー氏の手紙

セミナーに見たトインビーへの関心

評論家　木村隆一

「トインビーと現代」のセミナーに示された学生たちの関心は大変なものであった。深夜まで続いた討論で寝不足気味だった頭も、山上の朝の空気でいっぺんに洗われたので、私は館長さんの部屋でコーヒーをごちそうになりながらゼミの申込書に寄せられた「応募理由」というのを全部みせていただいた。走り読みを終えながら、すぐに気付いたのは、それが次のようなトインビーに近づく思考の経過をほぼ明瞭に示していることであった。つまり、①まず国際関係のなかで日本をとらえなければならないと考え、②それが、世界史を知ろうという方向をとる、③と同時に、そういう歴史とはなんだろうというところへ向い、④以上のすべてをやっているトインビが、非常に重要視するらしい宗教とはなんだろうというところまで至るのである。ほとんどの学生がこの過程のどこかに位置付けられる。ただし全員の五分の一弱は、この過程を、宗教への直接の関心から逆にたどりだそうとしているらしい。むろん彼らの文章には、希望セクションに合せた配慮があるにしても、大体の位置の見当はつく。自分のテーマとする日本の近代化の研究に役立てたいという学生、特に史学科の学生が何人かいるのも目についた。それにしても、著名な大歴史家というトインビーに対する印象だけがだいぶ上回っているのは、当然といえば当然かも知れない。

『国際関係論』と『歴史の研究』という二つの大事業を、一人でささえたトインビーの巨大さを考えるまでもなく、彼が人をひき付けていく間口の広さ、その多様さをいまさらのように感じるのである。そこには、鈴木成高先生の言葉を拝借すれば、現代が求めている史学、あるいは史学に課せられている変化のなにものかがあるにちがいない。

第70回大学共同セミナー（夏季長期セミナー）

主題▼藝術のたのしみ
期日▼昭和49年7月18～21日
演劇・美術・音楽における伝統と現代

＜全体講義＞
◇伝統・その心とかたち――演劇の比較を中心として――
早稲田大学教授　河竹登志夫氏
◇能のたのしみ
東京大学教授　小山　弘志氏
＜セクション演習＞
A　戯曲の地平面
聖心女子大助教授　細井雄介氏
B　欧米演劇の伝統――日本演劇との比較――
慶応義塾大助教授　宮下啓三氏
（運営委員）
C　戯曲から演技へ――演出の実際――
劇団民芸演出家　丹羽文夫氏
D　早稲田大学講師　西村博子氏
西洋美術における自然と人間

国立西洋美術館主任研究官　佐々木英也氏

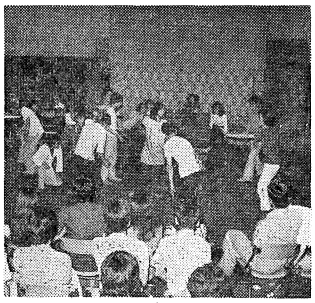
E　近代化のなかの日本洋画
　――その精神史の試み――
　東京大学助教授　芳賀　徹氏

音楽の楽しみ？――その受容・享受の考察――
　東京大学助教授　高辻知義氏

＜運営委員長＞
　東京大学助教授　小堀桂一郎氏

＜セクション演習補佐＞
　劇団民芸団員　佐々木研氏
　同　山本哲也氏

＜参加学生＞98名（内女子54名）慶大(11)、東京学芸大(10)、東大、早大(各8)、東女大、上智大(各5)、青学大(4)、中大、立大、専修大、大妻女大(各3)、東京医歯大、埼玉大、東京芸大、都立大、東洋大、武蔵大、津田塾大、都留文科大、玉川大(各2)、横浜国大、大阪市大、日大、武蔵工大、共立女大、成蹊大、学習院大、聖路加看護大、独協大、跡見学園女大、国立楽大、愛知学院大、上野学園大、女子聖学院短大、淑徳女子短大、日赤女子短大、尚美女子学園大(各1)　合計37大学


熱気にあふれた即興劇の夕べ

◆

本格的な芸術セミナーの実現は長い間、当ハウスの念願であった。幾度か共同セミナーを指導してこられた芳賀徹先生は開館五周年に当って「いまの日本の大学に最も足りないものの一つは、生きた芸術作品を享受しながら、さらにその新たな創造へと学生たちをうながすような雰囲気ないし場所である。……率先して実験を試みるべきはこの面でも、われらのセミナー・ハウスだろう」と提言された。

ようやくその機が熟し、小堀桂一郎、宮下啓三両委員の担当で企画された。ひとえに両先生の構想によって実現されたものである。

◆

この新しい試みは、指導された先生方の熱意と参加学生の自発性とが一体となって非常なもり上りをみせた。日頃その発現の場を十分に持たなかったのであろうか、三日目夜の「即興劇の夕べ」で、学生の旺盛な創造意欲が見事に開花した。東京芸大からの参加者は「こんなに楽しく、かつ有益だった集いは生まれて初めてだといっても言い過ぎではない」とアンケートに書き、講師の一人は「若者の驚くべく柔軟な創造性、独創性に強い衝撃を受けた」と、その印象を語った。

送別昼食会の席上、館長は、共同セミナー委員として長年ご尽力下さった芳賀先生と、本年3月その任期を終えられた小堀先生に心からの感謝の言葉を述べ、学生の手から花束が贈られた。お二人は九年間の大学共同セミナーの歴史の中で画期的な企画となったこの芸術セミナーが、今後も、毎年、この丘に続けられることを希望された。夏のセミナーとしてぜひとも定着させたいものである。

雨のち晴の清涼感
――芸術セミナーを運営して――

慶応義塾大学助教授　宮下啓三

四日間にわたる今回の共同セミナーの記憶は雨をぬきにしてはありえない。最後の夜を野外劇場で即興劇をたのしもうとする目論見も雨に押し流されてしまった。そうでなければ、あの魅力的な円形劇場がセミナー・ハウスのアクセサリーではなく、セミナーそのものの舞台であることを証明する最初の催しとなったはずだ。

だが、雨を恨みはすまい。降りつづく雨のおかげでテニスコートは誘惑の力をうしない、その分だけ長く充実したセクション演習の時間をもてたのだから。そして、雨のたすけにもかかわらず、また三泊四日という通常のセミナーにない長い日程にもかかわらず、私たちはこれでも短かすぎるという感慨をさえいだいた。私たちは蒔かれた種子から芽生えて成長したものを穫りとろうとするつもりで集まったはずだったのに、たがいに種子を蒔きあったばかりで別れなければならなかったのだ。

セミナー・ハウスの企画として七〇回目にしてはじめて芸術を主題とする合宿が実現したというのは、不思議といえば不思議なことだ。芸術はアカデミズムにふさわしくないというのだろうか？　先例のないこころみの企画運営をまかせられて私は当惑した。その当惑は内容決定とパンフレット作成の遅れとなってあらわれた。ポスター類が関係各大学に配布されたのはセミナー開始まで一ヵ月足らずというきわどい時点であった。構想を練ったり講師の方々に交渉する上での困難さなどの楽屋話はこの際やめよう。短い期間なのに学生諸君が数多く参加してくれたという事実の重さをこそ特筆しなければならない。芸術とは、どのみち創造行為だ。そして、学生諸君の創造のエネルギー、どうやら大学のキャンパスで眠らされていたらしいエネルギーが、演劇・絵画・音楽の三部門からなる今回のセミナーで見事にあらわれた。かえりみればさまざまな不備の点もあったことを企画者の一人である私は深く反省しているが、学生諸君の若々しい創造意欲に発現の場を提供できたことを自己満足させてほしいとも思う。私たちの意を汲んで協力して下さった講師の方々に対して感謝のあらわしようもない。が、多分それ以上に、参加してくれた学生諸君の力がセミナーを意義あらしめたと私は確信する。うまく進行するだろうかと不安にさいなまれていた私たちの思惑をよそに、学生諸君は、ときに与えられたテーマや討議材料に手きびしい批判をしながら、立派に彼ら自身のセミナーを実現してみせたのだ。そうであってこそ芸術セミナーの名にふさわしいではないか。この分なら、芸術セミナーはセミナー・ハウスの良き伝統の一つとなりうるだろう。これから先も雨を歓迎しないではないが、野外劇場を使う夜ぐらいは晴れてほしいと私は切実に願っている。

大学共同セミナー開催予告

第73回　東洋と日本
―創立九周年記念セミナー―
11月8～10日

◆シンポジウム
―講演と問題提起者―
東京大学教授　山井　湧氏
大阪大学教授　湯浅泰雄氏
国学院大学教授　三枝充悳氏

◆主題講演
国際基督教大学教授　山本達郎氏

第4回国際学生セミナー　アジアの平和と開発―新しいアジア像を求めて―
12月12～15日

第10回大学教員懇談会

主題▼新しい大学像を求めて
期日▼昭和49年6月29～30日

＜発題講演＞
シラキュース大学名誉教授
モーリス・E・トロイヤー氏
（通訳）国際基督教大学教授
原　一雄氏

＜シンポジウム＞
元文部事務次官　天城　勲氏
広島大学学長　飯島宗一氏

＜全体討議＞
（コメンター）
慶応義塾大学教授　斎藤幸一郎氏
東京大学教授　今道　友信氏

＜参加者＞42名
東工大、農工大、広島大、法政大、上智大(各3)、東大、電通大、中大、専修大(各2)、東京学芸大、東京医歯大、北大、東教大、都立大、武蔵工大、明学大、順天堂大、理科大、東経大、東京家政学院大、大妻女大、東女大、ICU、武蔵大、東洋大、慶大(各1)、その他(2)

＊

今回はICUの創立に参画し、十数年にわたり副学長をつとめられたモーリス・E・トロイヤー博士（教育行政学）が来日されたのを機に企画された。

自民党の大学改革案、文部省の大学院大学構想など次々と出されている昨今なので、本質的なテーマを取り上げて議論することにした。

先ずトロイヤー氏が今日の自然資源の枯渇の問題から、技術革新、経済成長をになってきた大学の責任を問い、大学が思想的改革の担い手となるためには、その管理機構はどのように改革されるべきかを、トロント大学の場合を一つのケースとして提示された（内容は一頁参照）。

続いて夜のシンポジウムでは、「大学のスクール化」と題して天城氏が、「大学の歴史的役割と大学の自治」と題して飯島氏がそれぞれ発題講演をされた。university-higher education—post-secondary education という役割の変化の中での現実の大学を見つめていくことこそ緊要であるという天城氏に対して、飯島氏はその現実をおさえながら、なおかつ情勢論への対応にのみ追われずに、学問的創造性こそ大学の使命として考えていくべきであると主張された。

二日目の全体討議は前日の発題をふまえて、斎藤・今道両氏がコメンターとして問題提起をされた。今道氏は、そもそも大学は改革を必要とするのか、現実に東大で行われてきた〝改革〟とは日常性の研究の破壊ではなかったかという視点で、同氏の学部に限定して論理を展開された。大学の画一性、教員の質の低下等、多くの問題が出され、一方では後期中等教育のひずみをそのまま抱えている学生集団をもつ大学の悩みなど、それぞれの立場から活発な討論が行われた。いずれにしても改革論は一つの大学の中で行われるべきものではなく、このような inter-university の場でなされてこそ意味があるというのが一致した意見であった。

一〇回を迎えた当懇談会が、基調テーマの路線にもどり、「大学は本来どのようにあるべきか」について考えたことは、大変意義のあることであった。

寄贈図書

昭和49年4～5月

「自然法則と不変性」　江沢洋殿
「国際交流」第1号
国際交流基金殿
「国立教育研究所紀要」第84・85集
国立教育研究所殿
「実存主義講座」（全8巻）
飯島宗享殿
「早稲田フォーラム」4号
早稲田大学広報課殿
「訳注万葉東歌」
五唐勝殿
「職業と教育」「現代の家族生活」
大学婦人協会殿
「会報」第25号
アメリカ研究振興会殿
「オーストラリア・ニュージーランド」日豪関係セミナー委員会殿

セミナー・ハウスと私

国立音楽大学教授
熊谷　孝

たしか六年前のことです。その時分、音楽の科学の会という学生主催の自主ゼミが学内にあって、科学分類論に取り組んでいました。その年の冬です。ゼミの年間総括を合宿してやることになったとかで、コメンターとして私も引っぱり出されることになりました。その折の会場が、このセミナー・ハウスだったわけです。この施設を私が訪れた最初です。

学生諸君の討論は、ふだんそうである以上に、なぜかここでは一段と活発で充実していました。レーンやロビーで見かける他の大学のゼミ所属の学生諸君の眼も、また一様に澄んで、いきいきとしていました。それは、ふだん大学のキャンパスで見る多くの学生の眼とは別のものでした。

面識のあるはずもない、これらの学生諸君や教授諸氏が、行きずりに「おはよう」とか「寒いですね」と私たちに声をかけてくれるのもまた驚きでした。学生族とは教師に対しては無愛想にふるまうように出来ている人種であり、教授族という人種はまた、特定の相手に対するとき以外は仏頂面している種族だ、という私の経験的判断は判断の根拠を失いました。私にとっては観念としてしか存在しえなかった大学人というもの、大学人相互の交歓の姿をそこに見た思いでした。

以来（俗な言いかたで恐縮です）、私はセミナー・ハウスのファンになりました。誘われてではなく、今度はこちらから担当ゼミの学生を誘って、ここへやって来るようになりました。学生諸君がこの施設とこの人的環境の中で、ホンモノの大学人に成長するきっかけをつかんでくれるのを期待してのことです。

私の所属するパーティ、文教研——文学教育研究者集団も、今年でまる五年、ここの施設を使わせてもらって長期の合宿ゼミを持ち、年度大会を開催して来ておりますが、会場を常にセミナー・ハウスに求めてという集団のメンバーの気持の根底には、やはりこの人的環境への信頼と共感ということがあるようです。

最近の例で申しますと、私たちは、ここの講堂を会場にして8月上旬、三泊四日の日程で、＜教師自身のための文学史研究の集い＞という百二十名規模の集会を持ちました。＜私の大学／芥川竜之介から太宰治へ＞というのがその集会テーマでしたが。

この集会には初参加の会員も少なくなかったのですが、設備や食事のこととあわせて、とりわけ人的環境には満足し切っていたようです。現実に多くの学生諸君の＜

ピアノ募金、目標額を達成!!

前号で、開館九周年にあたり、食堂用ピアノ購入のための募金をお願いしておりましたが、多くの方々のご協力を得て、目標額三〇万円を達成することができました。ここにそのご報告ができることはまことにうれしい限りです。

ピアノは7月5日の開館九周年を祝う会に間に合うように備えつけられ、早速当夜のパーティ、第70回共同セミナー〝芸術のたのしみ〟にその有効性を発揮しただけでなく、この夏の間、多くの宿泊者に愛用され交換の集いに色どりを加えてくれました。本当に利用価値のある物品寄付でした。近来にないよい企画で、いつにかわらぬご協力をいただきありがとうございました。

●

〈寄付者氏名〉　8月31日現在

二、〇〇〇円　国際開発センター講師　佐瀬六郎殿
一六、〇〇〇円　第68回共同セミナー殿
一〇、〇〇〇円　株式会社友映殿
一〇、〇〇〇円　「アジア人会議」実行委員会殿
八、〇〇〇円　第69回共同セミナー殿
五〇〇円　学芸大学教授　角尾稔殿
一〇、〇〇〇円　青山学院大学教授　秀村欣二殿
七、〇〇〇円　武蔵大教授　岩田龍子殿
一、〇〇〇円　東京工業大学教授　慶伊富長殿
一、〇〇〇円　フェリス女学院大学　小塩トシ子殿
七、四四〇円　30万人達成記念募金箱
五、〇〇〇円　青木孝雄殿
三、〇〇〇円　八王子市長　後藤聰一殿
三、〇〇〇円　八王子市教育長　師岡春治殿
一〇、〇〇〇円　村越造園　村越惣十郎殿
二、〇〇〇円　サンエスクリーナー殿
一〇、〇〇〇円　銀和徽章殿
五、〇〇〇円　飯田恵・飯田八千代殿
三、〇〇〇円　山崎典殿
三、〇〇〇円　八王子市議会議員　石井栄治殿
一、〇〇〇円　豊島広司殿
一〇、〇〇〇円　右田病院長　松本樺太殿
一、〇〇〇円　中央大学教授世良正利殿
一、〇〇〇円　大妻女子大学　佐藤博殿
五、五〇〇円　昭和49年度会員校事務連絡会出席者一同殿
一八、三六〇円　開館九周年記念募金箱
五、〇〇〇円　詩人　藤富保男殿
一、〇〇〇円　新潮社大内敏明殿
三、〇〇〇円　国立教会聖歌隊殿
三、〇〇〇円　成蹊大学宇野ゼミ殿
二〇、〇〇〇円　東京大学助教授　小堀桂一郎殿
一五、〇〇〇円　東京大学教授　小山弘志殿
一〇、〇〇〇円　慶応義塾大学助教授　宮下啓三殿
七、八六〇円　第70回共同セミナー殿
二、〇〇〇円　府中市役所新人係長研修生一同殿
五、五五〇円　第8回JACETセミナー殿匿名
一、五〇〇円
一、三一〇円　東京理科大学国分心理ゼミナール殿
一〇、〇〇〇円　前青山学院大学教授　尾崎茂殿

台風16号で本館前のがけ崩れる

9月1日の台風16号は奥多摩に記録的な豪雨を降らせ、狛江で多摩川の堤防が決壊するなど大きな被害をもたらしたが、八王子付近も至るところにガケ崩れがあった。セミナー・ハウスでも、本館前の広場の南斜面が広範囲に崩れ落ち、自動車の駐車ができなくなった。早急に復旧工事にかからねばならないが、概算一千万円を要するとのことである。

がけ崩れの被害を受けた現場

特殊教育学科新入生歓迎合宿ゼミ

東京学芸大学助教授　氏森英亜

諸手続をする必要性もあって、ハウスのフロントに向かうと、係の方々が実に親切であり、さらに、「本日は皆さんのために野点が催されています。そちらで一服して下さい」とすすめられ、元来がさつな身である私などはおおいに恐縮する思いであった。

他のさまざまな大学の学生と共にする食事場面も、また、一種独特の雰囲気があったようだ。当初はなんとなくしめやかであったのが、交歓が進行するとともに、次第にその壁が感じられなくなり、自然と大学間を超えた若人たちの語らいの場が形成されていった。大食堂における、あのなごやかな雰囲気は、やはりすばらしいものであったと今でも思っている。

夕食後、中央セミナー館において特殊教育学科新入生オリエンテーションが催された。夜9時以後は、さらに三課程が分散し、それぞれ課程別の談話会がもたれた。ろう、および言語課程では、教官と学生が膝つき合せて、大学生活にまつわる諸問題を、そして、養護課程では、理想の教師像とは何かについて夜おそくまで討論がなされた。今回の合宿によって、十分とはいえないまでも、学生一人一人の個性にふれることができたと思っている。

学生と一緒に語り、遊びを楽しむ時間が持てたことは何よりもまして私自身の心の洗濯が久しぶりでできた思いであった。（東京学芸大学「教務補導部だより」第35号より）

記念樹に植物名をつける

開館当時の小さな記念樹は大きく育ち、今では周囲の雑木林を圧倒するばかりである。将来は立派な森の丘になることだろう。

かつての学生諸君が久方振りに訪れて、異口同音に周囲の環境の変化に驚いているが、一方ではこの丘の建物と樹木を眺めて感慨深げに「風格ができたな」ともらしている。それが共に作った歓びの歴史なのではあるまいか。

数多い樹木について名前もよくわからず、とかく疎遠になりがちなので、この度構内の主な樹木に名札をつけた。木の名前を知って帰るのも、セミナーの功徳というべきか。木の名前には注意を払ったつもりだが、間違いがあったらご教示下さい。また名札のつけ方などについても、アイデアをおきかせ下さい。

真摯な姿を目にしながら、わが学生時代を偲びつつ、〈私の大学〉に参加しえた悦びを語って郷里に帰って行った参加者もありました。

マスコミ余波・・・・・・・・・新館長就任以後

6月14日の理事会決定「飯田新館長就任」をいち早く報じたのが朝日新聞夕刊（6月18日）の「今日の問題」（本紙前号に転載）であったが、日を同じうして日本経済夕刊の「あすへの話題」には、高階秀爾氏によって書かれた「ダルウィッチの五月」が掲載された。英国の新緑の美しさと恵まれた自然環境にある子供たちについて書かれている。その時、氏がふと思い出されたのが、当ハウスでの学生とのふれ合いであった。「おそらくダルウィッチの場合でも、八王子の場合でも、大きな自然に包まれた静かな環境の中で、学問に没頭したという思い出は、その人にとって生涯大きな支えとなるものに違いない」としめくくられている。

6月24日（月）には、NHKテレビの朝の番組スタジオ102に新館長が登場。キャンパス風景や活動をとらえたカラー写真が十数枚紹介され、館長が約七分間インタビューに答えた。

新聞やテレビを通じて当ハウスを初めて知った遠く地方に住む方々から、館長宛に手紙が多数寄せられたり、東京の大学にいる息子にもぜひ参加させたいと思うが、その方法は？など、教育活動や施設に関する問合せの電話が業務課にかかった。反響が大きいことに驚きました。

「大志を抱いてセミナー・ハウスに来たれ！」という見出しで報じたのは、平凡パンチ7月22日号。紙面四頁の中には「熱い討論から熱い恋も芽生える」という同誌らしい内容もあったが、取材に当たった早大OBの記者氏、まずは正当に紹介。折から芸術セミナーの募集に入っていたため、応募学生の中には「平凡パンチで知った」という者もあって、この反響にも一驚する。

週刊現代には江藤淳氏が「こもんせんす」を連載されているが、その7月25日号「金のつかいかた教えます」には、去る7月の参院選挙投票日から数日にわたりゼミの補講で当ハウスに泊られたことが書かれている。「こんどの狂乱選挙で舞い込んだ札束のほんの少しばかりをつかっただけで、こんな素晴しい場所ができるんですね。企業も政治家も金のつかいかたをまるで知らないんじゃないですか」というのが、その本旨である。

読売新聞朝刊（7月30日）の「今日の断面」では〝寝食を共にする教育―大学セミナー・ハウス一〇歳に〟として紹介。

この二ヵ月間、新館長がマスコミの話題となったのも、当ハウスが日本の中に成長したということでしょうか。

第8回会員校事務連絡会

昭和49年7月5～6日

今回は二二校三七名の出席のもとに、前回と同じく泊り込みで開催された。施設見学の後、三時より講堂において開会。北沢業務課長の司会で、まず館長の挨拶があり、出席者から自己紹介の際、感想と意見を述べてもらった。大半が当ハウスに初めて来られた方々とあって、皆予想外の環境に感嘆。館長の挨拶の中に「雨が降れば傘をさして食堂に行く、その間の道のりの中でゼミで疲れた頭をいやすことができる。雨にぬれることなく歩くことのできる現在のコンクリートづくめの大学と異なるところが、このセミナー・ハウスである」という言葉に対して、「まことにその通りで、久しく忘れていた自然のままの姿にひたることができた」という感想が、中でも印象的だった。

次に業務課長より四八年度の施設利用状況について報告があり、五時二〇分、一応連絡会を終了し、引き続き九周年記念行事に参加していただいた。

翌朝は、ラウンヂにおいて、主として企画課が共同セミナーの説明を行い、十一時に閉会。

今回は、九周年記念行事に合流したため、討議の時間は少なかったが、行事に参列して共に九周年を祝っていただくことができた。

▼会員校事務担当者名簿▲

大学名	職名	氏名	担当部課
青山学院大学	学生課	岸　実	学生部学生課
大妻女子大学	教務部長	佐藤　博	教務部学務課
お茶の水女子大学	課外活動係長	細井　隆一	学生部学生課
学習院大学	庶務部長	衛藤　維彦	大学庶務部
共立女子大学	学生生活課長	平岡　之長	学生部学生生活課
慶応義塾大学	庶務課長	板垣　良助	文書部庶務課
国際基督教大学	学生事務課長	青木　実	学生活動室
順天堂大学	学生課長	上西　守夫	学生部学生課
上智大学	学生生活課長	滝村　和久	学生部学生生活課
成蹊大学	庶務課	森下　安子	大学事務部庶務課
専修大学	学生生活課	中西　福治	学務部学生生活課
中央大学	学生課書記補	山本　雅一	学生部学生課
津田塾大学	学生生活課長	寺出　澄子	学生生活課
電気通信大学	学生課	塚田八州男	学生部学生課
東京大学	学生課長補佐	宮川　清	学生部学生課
東洋大学	学生課長	杉野　宏	学生部学生課
東京医科歯科大学	学生課学生掛長	栗林　恒雄	学生部学生課
東京学芸大学	学生課長	北沢　俊男	教務補導部学生課
東京外国語大学	教務係長	山本　唯雄	学生部教務課
東京家政大学	学生課長	見藤　妙子	学生部学生課
東京家政学院大学	教務課	松崎　三次	学生部教務課
東京教育大学	学生部補導課長	近藤　寛	学生部補導課
東京経済大学	用度営繕課長	佐藤　幹雄	用度営繕課
東京工業大学	教務課長補佐	林　俊彦	教務部教務課
東京慈恵会医科大学	進学課程事務長	下　雅夫	教務部教務課
東京女子大学	学生課長	鈴木　法子	学生課
東京都立大学	学生課主事	岡部　光男	学生部学生課
東京農工大学	学生部学生掛長	浦沢　健治	学生部学生課
東京理科大学	庶務課長	佐藤　東明	庶務課
日本大学	学生部長	田淵　三郎	学生部学生課
日本女子大学	学務部長	辻　キヨ	学務部課外活動課
法政大学	厚生課長	秋本　昭男	学生部厚生課
武蔵大学	学生生活課長	曾田　保	学生部学生生活課
武蔵工業大学	学生課長	川嶋　辰雄	学生課
一橋大学	学務課学生係長	内藤　宏	学生部学務課
明治大学	学生課長	永野　徳光	学生課
明治学院大学	総務課	箕輪　潔	総務部総務課
横浜国立大学	学生係長	吉田　保雄	学生部厚生課
立教大学	学生部副部長	足立省一郎	学生部学生生活課
早稲田大学	学生生活課	高瀬　敏行	学生部学生生活課

●業務通信

各大学の新入生オリエンテーションは、4、5月をピークにして、6月で終っている。

6月は、卒論ゼミが多かったことも一つの特色であった。東京理科、工学院、東京学芸、早稲田の各大学のゼミが、卒論の指導、中間発表を行っている。

アジアにおける経済開発と環境の将来をテーマに、「アジア人会議」が四日間にわたって開催された。内外から多数の参加者があった。アサヒグラフは彼らの研修生活を生々と報じている。

7月に入ると各大学のゼミの利用が活発になる。補講や集中講義を目的としたものが多かった。同時に社会人の利用も急増した。大学英語教育学会の夏期セミナーは今年で八回目を迎え、すっかり夏の常連となった。〃大学英語来らずして夏は来ず〃とは、当ハウスでささやかれる合い言葉である。他に夏の常連としては、英語教育協議会（ELEC）、語学教育振興会（COLT）、国立特殊教育総合研究所補聴研究会、文学教育者集団などで、暑さに負けず熱心な研究・研修態度には、いつもながら敬服させられる。

この夏に初めて利用された主なグループは、日本私学教育研究所主催の全国私立中高生徒指導研究会、渋谷教職員教育研究会、日本友和会、家裁調査官の研究会、日本建築学会、地方自治センターなどである。中でも変り種は、日本地図センター主催の中・高等学校の先生を対象とした研修会で、講堂いっぱいに地図、文献類を展示し、最後に当ハウス周辺を実地に歩くオリエンテーリングを行っていた。

◇

8月には今回が三度目の利用となるアメリカ、ニューヨーク州コルゲート大学の日本研究グループを迎えた。引率者ゴードン・ボールス教授夫妻は、戦前は一高で、戦後は東大教養学部で教鞭をとられたほどの知日家であり、日本に多数の友人を持っている。この度は国際会員校となってから最初の来日である。暴風雨の影響で飛行機が大幅に延着したが、皆元気でこの丘に上ってきた。中には昨年きた学生もおり、一年ぶりの再会を喜んだ。9月下旬まで滞在して日本語の特訓を受ける。

この三ヵ月の利用状況は次のとおりである。前年度に比し若干の延びがあった。

	前年度延人員 人	本年度延人員 人	増加 人
6月	三、二三	三、三五	一三
7月	三、三八	四、二五	九七
8月	四、四五四	四、一八	△三六
計	一〇、九九四	一一、六〇八	六一四

●利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用

◆6月

東京経済大学教授　色川　大吉
東京経済大学講師　村上　勝彦
学習院大学教授　森永　毅彦
東洋大学助教授　松永　恒之
学習院大学教授　児玉　久雄
東京都立大学教授　奥口　孝二
東京都立大学助教授　＊水谷　三公
慶応義塾大学教授　小茂鳥和生
中央大学助教授　飯田　浩三
共立女子大学教授　玉岡　忍
東京学芸大学教授　若桑　英清
法政大学教授　石川　淳志
東京都立大学教授　江藤　价泰
東京学芸大学助教授　小川　仁
東京都立大学教授　辻　正三
東京理科大学教授　富沢　稔
日本大学助教授　原田　行男
東京都立大学教授　塩崎　進
東京都立大学教授　三井　為友
東京都立大学教授　山口　重雄
東京学芸大学助教授　小川　博久
お茶の水女子大学教授　＊大宮　誠
早稲田大学教授　川原　栄峰
明治学院大学教授　神保　信一
東京都立大学教授　千葉　正士
明治大学助手　中村　幸安
東京都立大学教授　鈴木　建三
東海大学医療技術短期大学教授　内田　靖子
職業訓練大学校職員　清水　正男
工学院大学教授　波多江健郎
フェリス女学院大学助教授　小塩トシ子
㈳日本能率協会「アジア人会議」実行委員会
第69回大学共同セミナー
第10回大学教員懇談会
大丸東京店＊
積水ハウス多摩営業所
日本水産
京王プラザホテル
日本特殊鋼
フジタ工業

【個人利用】

聖心女子大学学生　原　洋子
郷土史研究会　桧垣　政勝
上智大学講師　Tokhi Kang

◆7月

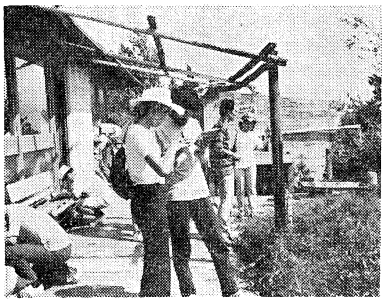
日本大学助手　長谷川清之
上智大学助教授　J・ガラルダ
武蔵大学教授　村田　清夫
学習院大学教授　大川　章哉
東京大学教授　＊北垣　信行
東京都立大学教授　佐藤　英男
東洋大学教授　飯島　宗享

名残りの夏―恒例の盆踊り

慶応義塾大学教授　十時　厳周
明治大学助教授　入江　隆則
東京慈恵会医科大学附属第三分院小児科講師　熊谷　公明
東京学芸大学教授　稲森　潤
東京工業大学教授　江頭　淳夫
東京大学助教授　芳賀　徹
横浜国立大学助教授　市川　博
東京都立大学教授　唄　孝一
学習院大学教授　門脇　卓爾
東京都立大学助教授　大島　一郎
東京大学助教授　＊見田　宗介
一橋大学教授　佐々木潤之介
上智大学教授　松下　満雄
大妻女子大学教授　隈部　直光
日本大学教授　小林　正一
お茶の水女子大教授　森　隆夫
東京都立大学講師　栗原　彬
一橋大学教授　山下　邦男
慶応義塾大学教授　和田木松太郎
東洋大学講師　早川　和男
国際基督教大助教授　斎藤　和明
一橋大学教授　長沢　惟恭
慶応義塾大学教授　＊加藤　寛
早稲田大学教授　川原　栄峰
成蹊大学教授　＊宇野　重昭
法政大学教授　岡本　秀昭
立教大学助教授　栗原　彬
お茶の水女子大学助教授　小川　洋輔
法政大学学友会技術連盟　木原　太郎
東京大学教授　岸　英朗
青山学院大学助教授　田辺　良美
東京都立大学助教授　荒　憲治郎
一橋大学教授　大田　堯
東京大学教授　神保　信一
明治学院大学教授

青山学院大学教授　佐藤　和男
武蔵工業大学助教授　安味　貞正
中央大学教授　川添　利幸
明治学院大学助教授　原田　勝弘
明治学院大学講師　吉原　功
東京理科大学講師　国分　康孝
東京学芸大学助教授　森田　桐郎
東京学芸大学助教授　降旗　勝信
大妻女子大学講師　長野　格
成蹊大学助教授　紋谷　暢男
明治学院大学教授　阪柳　豊秋
千葉商科大学教授　小竹　豊治
東京神学大学教授　大木　英夫
埼玉大学助教授　島岡　光一
独協大学教授　林　俊一
早稲田速記学校マスコミ研究会
共立女子短期大教授　青山　誠子
山梨英和短期大学助教授　小菅　東洋
神奈川大学助教授　堀野　定雄
都留文科大学講師　和田　明子
産業能率短期大学　府中市新任係長研修
東京YWCA学院秘書養成科
桑沢デザイン研究所
日本ルーテル教団
日本キリスト教団国立教会聖歌隊
大学英語教育学会第8回セミナー
保育芸術協会
日本能率協会
(財)日本私学教育研究所
さつき会（読書会）
京王プラザホテル新入社員オリエンテーション**
ミサワホーム総合研究所
日本特殊鋼
山田建設
読売情報開発センター
スリーボンド

【個人利用】
東京理科大学職員　山下　輝雄
工学院大学助教授　今井　義夫
山脇学園短期大学助教授　松木　葭子
広島工業大学学生　沖　範明
日本放送協会国際局アジア部　石井　一成
日本女子大学学生　山中　徳則
原田　治美


オリエンテーリング開始（サービス・センター前）

◆8月
上智大学講師　田中　大
青山学院大学　経済経営ゼミナール委員会
東京理科大学教授　伊丹　邦夫
東京都立大学助教授　小沢　有作
慶応義塾大学教授　加藤　寛
東京都立大学講師　高木　鉦作
明治大学文学部ゼミナール協議会
慶応義塾大学工学部研究会
日本女子大学助手　平岩　静子
東京女子大学講師　篠原　昌彦
早稲田大学戸沼ゼミ
一橋大学教授　竹内　啓一
東京理科大学教授　大沢綱一郎
法政大学教授　北川　隆吉
明治学院大学助教授　高野　史郎
東京大学英書講読　村田　経和
学習院大学教授　内田　道雄
東京学芸大学助教授　大島　利雄
東京大学助手　笠　耐
上智大学講師　嘉納　成男
早稲田大学講師　梶川　勇作
東京都立大学助手
早稲田大学読書研究会　綾井九州彦
国士館大学教授　永野　賢
東京学芸大学教授　千野　陽一
東京農工大学教授　杉山　吉茂
東京家政大学佐藤グループ
東京学芸大学助教授
慶応義塾大学英語会
東京家政大学助教授　橋口　英信
国際基督教大学教授　村木　正武
日本大学教授　瀬川　渡
東京経済大学教授　門上　秀叡
法政大学教授　安井　郁
東京都立大学助教授　塩谷巳律雄
上智大学教授　平井　久
お茶の水女子大教授　藤永　保
日本大学教授　中島　邦男
女子聖学院短期大学　キリスト教倫理ゼミ
都立商科短期大教授　竹中　尚文
東京スクールオブビジネス　英語研究会
都立立川高校英語部
井土ヶ谷キリスト教会
モラロジー研究所　東京多摩支部
江戸川区民センター
地方自治センター
文学教育研究者集団
大学連合後藤ゼミナール
日本建築学会関東支部研究委員会
家裁調査官研究会
東京都高等学校英語教育研究会
国際経済商学学生協会
国立特殊教育総合研究所
千葉市幼稚園協会
英語教育協議会
東京教授聖書研究会
シェイス英会話学院
語学教育振興会
東京第一バプテスト教会
日本友和会
所沢キリスト教会
日本地図センター
渋谷区教職員教育研究会
横浜国立大環境科学研究センター
産業能率短期大学
白金幼稚園
マックス・ウェーバー研究会
商業労連
ADO本部
日本特殊鋼

【個人利用】
東洋大学短期大学助教授　**村松　友次
フレッド・スワン夫妻
東京農工大学助教授　高橋　香
東京大学教授　北垣　信行
職業訓練大学校　谷　卓郎
グリーン英会話同好会　渡部　昇
慶応義塾大学学生　*森島三智子
生化学工業　小林　好男
東京都立大学教授　野間　三郎
武蔵大学学生　真島　克

●館長日記から

忙しかった夏が終った。音もなく秋の風が萩の花を動かしながら通り抜けていく。今年も9月15日は敬老の日としてめぐってきたが、7月から五十肩がはじまり、六四歳にしてその痛さを知る。

コルゲート大学のボールス教授夫妻が学生達と鎌倉にいくという。朝の大気の中で彼等を見送る。館長室で東大医学部小林教授と朝のお茶をたしなむ。食堂で青山学院神山、早大北野、立教村田の諸教授に挨拶し、東工大江藤淳教授ゼミと朝食を共にする。とてもうれしい朝である。

朝食後は台風16号の土砂崩れ復修工事のため監督らしい口出しをして時を過ごす。被害は甚大であったが、かやばしの前に土盛りができるから、記念樹の庭園として打ってつけのサンク・ガーデンができるかも知れない。

この三ヵ月「大学を開く」の原稿を書きつづけている。創立十年記念年史として皆様におとどけできる日も近い。それを思うと私は五十肩を忘れるのである。セミナーの丘から仰ぐ秋の空は大きく、高く、そしてよく澄んでいる。

館長就任を祝って旧奉仕グループの諸君から紅侘助（つばき）をいただいた。若い人々の心のように若葉の色が美しい。